

(純増ベース、金融債、国債を除く)は、政保債が引き続き控え目に押えられたうえ、電力債、一般事業債の起債希望もこのところ一服状態を続けているため、前月比85億円減の見込みとなっている。なお、長期国債の市中引受予定額は100億円と前年同月の半ばにとどめられ、このうち証券会社引受分はさきの年度間国債減額決定に伴い、54億円に圧縮されることになった。

起債状況

(単位・億円、カッコ内は純増ベース)

	42年				
	6月	7月	前年同月	8月 見込み	前年同月
合計	899 (622)	836 (556)	707 (453)	826 (471)	665 (363)
事業債	482 (284)	428 (242)	343 (166)	437 (223)	275 (71)
一般	321 (176)	266 (150)	199 (89)	276 (135)	147 (8)
電力	161 (108)	162 (92)	144 (77)	161 (87)	128 (62)
地方債	67 (39)	68 (49)	59 (43)	69 (49)	60 (42)
政保債	350 (299)	340 (265)	305 (244)	320 (199)	330 (251)
金融債	1,762 (687)	1,481 (441)	1,347 (412)	1,750 (664)	1,427 (478)
利付	577 (306)	600 (331)	576 (296)	720 (439)	622 (336)
割引	1,186 (381)	880 (110)	771 (116)	1,030 (225)	805 (143)
新規長期 国債	300	100	200	100	200
証券会社 引受分	66	62	70	54	68

実体経済の動向

◇経済活動は根強い拡大基調を持續

最近の経済活動は、依然として根強い拡大基調を続けている。すなわち、鉱工業生産は6月に+2.4%と著増のあと、7月の速報では横ばいとなり、出荷も6月に+0.9%と増加のあと、7月(速報)には-0.3%と伸び悩むなどいずれもその足取りは一服ぎみとなっているが、これには例月激しいフレを示す電力向け大型機械や鋼船の反動減などの一時的な要因がかなり響いており、これまでの生産出荷の基調がここへきて大きく変わったとはみられない。

このように、生産、出荷が基調として根強い動きを続けているのは、輸出が依然停滞を続けているものの、民間需要が設備投資、個人消費を中心にかかなりの盛り上がりを見せているうえ、財政需要も最近ようやくこれまでの遅れを取りもどしてきているためである。すなわち、輸出は米国向けが相変わらず不振を続けているうえ、南ベトナム・香港等東南アジア向けもこのところ不振の様相を呈しており、全体としてこれまでの伸び悩み傾向を改めるには至っていない。また在庫投資についてみると、仕掛品在庫が生産の動きにほぼ見合って増加しているとみられるほか、メーカー原材料在庫、販売業者在庫も、その増勢はひとところほどではないにしてもかなりの増加を続けているのに対し、メーカー製品在庫はここ1両月減勢を示しており、在庫投資全体としての景気支持力は今春ころに比べ、このところやや後退しているよううかがわれる。

一方民間設備投資は、一般資本財出荷の根強い増勢(電力向け大型機械を除いた一般資本財出荷は季節変動調整済みで対前月比5月+6.8%、6月+4.5%、7月+5.6%)や、これまで毎四半期2割増程度の増加を続けてきた機械受注の動きなどから推して、相当高いテンポで増加を続けている

ものとみられる。8月時点調査の本行「主要企業短期経済観測」の結果をみても、全産業の設備投資は季節変動調整後の対前期比で、1～3月+9%、4～6月+14%と増勢を強めたあと、7～9月も+10%(実現率で修正すると+7%)と依然相当の増加が見込まれている。また設備投資と並んで個人消費の根強い増加もこのところ目だっている。最近の百貨店売上高や全都市全世帯の消費支出が、労働力需給の引き締まりに伴う賃金水準のジリ高傾向を背景にかなりの伸びを示しているのは、消費堅調の一端を示すものといえる。こうした民間需要の増加に加え、最近では官公需もようやく遅れを取りもどし、景気促進の役割を果たすに至っている。すなわち、暫定予算の関係で4～5月にかけて著しい出遅れをみせた公共事業費支払は、本予算の成立とともに、その後徐々に増勢を強めつつあり、7月末における公共事業費支払進捗率は、ほぼ例年並みの水準にまで復するに至っている。

このように民需が全体としてかなりの盛り上がりを示しているうえ、財政需要も再び増勢を盛り返す動きをみせているため、経済活動の拡大テンポが今後大きく弱まる公算は乏しいとみられる。前記「主要企業短期経済観測」では、7～9月期、10～12月期の生産はいずれも対前期比+6%強(実現率修正済み)と、これまでとほぼ同様(41年10～12月+6.1%、42年1～3月+4.6%、4～6月+6.1%)の高い伸びが予想されていることはかかる一面を示唆するものといえよう。

(生産——上伸基調を持続)

6月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、5月に前月比+0.9%と増勢がいくぶん鈍化したあと+2.4%とかなりの増勢を示した。これには、①電力向け大型機械が前月著減の反動から急増したこと、②石油が設備の定期修理の終了から大幅に増加したこと、などが少なからず響いているが、これらの点を考慮しても生産は根強い増加基調を示している。

6月の動きを特殊分類別にみると、一般資本財

(+7.6%)は電力向け大型機械の著増を主因に、資本財輸送機械(+5.3%)も鋼船、トラック等を中心にそれぞれ大幅な増加を示した。また耐久消費財は、小型四輪自動車や自動二輪車の大幅増加に加え、家庭用電機の増加もあって+3.0%と相当な増産となり、生産財も上記石油の反動増のほか、鉄鋼の増加などから+1.6%と引き続きかなりの伸びを示した。この間、建設資材は亜鉛鉄板の増加にもかかわらず、鉄骨、橋りょうの減少から+0.7%と小幅の増加にとどまり、非耐久消費財は、たばこの減産が響いて-0.5%と微減した。

鉱工業生産の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	41年		42年		42年		
	7月 9月	10月 12月	1月 3月	4月 6月	5月	6月	7月
鉱工業	199.0	210.0	218.7	228.6	227.5	233.0	232.8
前期(月)比	4.6	5.6	4.1	4.5	0.9	2.4	0
前年同期(月)比	14.0	19.3	19.9	20.2	19.3	21.1	18.6
投資財	4.5	7.1	6.9	5.3	0.6	4.9	-2.2
資本財	4.5	8.7	7.4	5.6	0.2	6.2	-2.0
同(輸送機械を除く)	3.3	9.1	6.7	8.4	-1.2	7.6	-0.4
輸送機械	6.7	7.5	8.1	2.8	1.4	5.3	-3.8
建設資材	5.1	2.3	4.9	3.9	1.9	0.7	-2.1
消費財	2.0	2.3	0.4	3.0	0.9	1.2	-0.1
耐久消費財	7.1	6.4	2.9	4.2	-1.8	3.0	1.0
非耐久消費財	-0.3	0	0.1	1.4	2.9	-0.5	-0.3
生産財	5.6	5.4	5.0	3.6	1.7	1.6	0.8

(注) 通産省調べ、42年7月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

7月の鉱工業生産(季節変動調整済み、速報)は、6月に+2.4%と大幅増加をみたあと、前月比横ばいとなった。しかし、これには①前月に急増した電力向け大型機械、鋼船が当月はその反動から大幅に減少したこと、②7月初めの集中豪雨による建設工事の遅延から受注が停滞し、建設資材がかなりの減少を示したこと、など一時的な要因が少なからず響いており、これらの点を考慮すると、基調としては引き続き相当のテンポで増加しているものとみられる(ちなみに、月によりフレの大きい電力向け大型機械、鋼船、動植物油脂の

3品目を除いてみると、5月+2.0%、6月+1.4%、7月+1.0%となる。

7月の動きを特殊分類別にみると、一般資本財は圧延機械、プレス機械、化学機械等設備投資関連機種的大幅増加にもかかわらず、電力向け大型機械の著減が響いて-0.4%の微減となり、資本財輸送機械は四輪車の減産や輸出不振を映じた自動二輪車の異常な落込みなどから-3.8%の大幅減となった。また建設資材も7月上旬の集中豪雨による建設工事の停滞から鉄構物、セメント等の生産が減少したため-2.1%とかなりの減産になり、非耐久消費財もたばこの減産などが響いて-0.3%と微減を示した。

他方、耐久消費財は扇風機、冷蔵庫等の売行き好調から、これらの追加生産が行なわれたため、カメラ等精密機械の減少にもかかわらず+1.0%とかなりの増加となり、生産財も前月に大幅増加をみた石油が反動減を示し、非鉄も鉛を中心に減産となったものの、化学肥料、石油化学製品を中心とする化学製品の著増から+0.8%と根強い増加を示した。

(出荷——根強い増加基調)

6月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、前月に+3.6%と著増を示したあと、+0.9%と小幅の伸びにとどまった。しかし、これには前月著増をみた鋼船が大幅な減少(-37.2%)を示すといった一時的要因がからんでおり、このところ月により激しいフレを示している電力向け大型機械、鋼船、動植物油脂を除いてみると、5月+2.1%のあと、6月も+2.5%と引き続き高い伸びを示している。

6月の動きを特殊分類別にみると、一般資本財は電力向け大型機械や普通鋼鋼管等の大幅増加から+9.1%と著増し、耐久消費財も小型四輪自動車、自動二輪車、家庭用電機等を中心に+7.8%と顕著な増加を示した。他方、生産財は鉄鋼製品、非鉄金属、石油製品等の増加にもかかわらず、機械(汎用内燃機関等)、綿織物等の減少から、+0.6%、また建設資材は窯業製品(耐火煉瓦等)が増加したものの、塩化ビニール硬質製品等の減少から

+0.7%とそれぞれ小幅の増加にとどまった。このほか非耐久消費財も、大宗を占める食料品が微増にとどまったため+0.4%と小幅の増加となった。この間、輸送機械は前月著増した鋼船の反動減が響いて-7.5%と大幅な減少を示した。

鉱工業出荷の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	41年		42年		42年		
	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	5月	6月	7月
鉱工業	194.0	204.0	212.9	219.2	221.1	223.1	222.4
指 数							
前期(月)比	3.7	5.1	4.4	3.0	3.6	0.9	-0.3
前年同期(月)比	13.2	18.0	18.5	17.1	18.5	17.0	16.2
投資財	7.0	5.7	6.9	5.1	4.8	0.6	-0.4
資本財	4.7	6.7	7.6	5.6	5.6	0.4	-3.7
同(輸送機械を除く)	2.4	7.9	6.7	8.4	1.6	9.1	0.4
輸送機械	7.1	4.8	9.6	3.2	13.3	7.5	-7.6
建設資材	3.3	3.9	2.5	3.3	2.7	0.7	-1.8
消費財	1.2	4.1	0.1	1.8	1.0	2.1	1.4
耐久消費財	5.4	5.2	3.9	10.0	0.5	7.8	7.0
非耐久消費財	0	3.9	1.2	0.9	1.8	0.4	0
生産財	5.1	5.0	4.5	3.1	4.2	0.6	0.9

(注) 通産省調べ、42年7月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

7月の鉱工業出荷(季節変動調整済み、速報)は、前月に+0.9%と増加したあと、-0.3%と微減した。しかしこれには、生産と同様に日々大きなフレを示す電力向け大型機械や鋼船が著減を示すといった一時的な要因がかなり響いており、これまでの出荷の基調がここへきて格別変わったとはみられない。ちなみに、電力向け大型機械、鋼船、動植物油脂の3品目を除いてみると、5月+2.1%、6月+2.5%のあと7月も+1.0%と根強い増勢を継続している。

7月の動きを特殊分類別にみると、輸送機械は輸出不振を映じた自動二輪車の著減に加え、モデルチェンジに伴う乗用車の減少などもあって-7.6%と顕著な減少を示し、建設資材も前記のような天候の影響から鉄構物、セメント等を中心に-1.8%とかなり減少した。他方、耐久消費財は、テレビ、ラジオ、扇風機等家庭用電機を中心に+7.0%と前月に引き続き大幅な伸びを示し

た。このほか、一般資本財は電力向け大型機械の著減にもかかわらず、化学機械、金属加工機械等設備投資関連機種的大幅増加から+0.4%の微増を示し、また生産財も鉄鉄、ブリキ等鉄鋼の減少にもかかわらず、化学製品(化学肥料等)や石炭・石油製品の出荷増を主因に+0.9%の増加を示した。この間、非耐久消費財はたばこが減少した反面、紙・パルプ製品が増加したことから横ばいとなった。

(在庫——減少続く)

6月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み)は、前月比-0.6%と5ヵ月ぶりに減少した。

これを特殊分類別にみると、建設資材は板ガラスの増加から+1.0%と若干増加したほか、非耐久消費財(+0.1%)、生産財(+0.5%)もそれぞれ微増を示したが、その他はいずれも目だって減少した。すなわち、一般資本財はエアコンディショナー、金属工作機械等の減少を中心に-6.6%と著減し、資本財輸送機械も、自動二輪車(50cc以上)、三輪トラックの減少を中心に-3.9%とかなりの減少を示した。また、耐久消費財も自動二

輪車、家庭用電機(扇風機、冷蔵庫)の減少から-4.0%と大幅に減少した。

上記のような出荷、在庫の動きを映じて、6月の製品在庫率は-1.5%(在庫率指数105.2)と前月に続いてかなり低下した。特殊分類別にみると、資本財輸送機械、建設資材が上昇したほかは各財とも低下したが、とくに一般資本財、耐久消費財の大幅低下が目だった。

7月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み、速報)は、前月の-0.6%に引き続き-1.2%の減少となった。最近の動きを3ヵ月移動平均によってならしてみても、4月+2.1%、5月+0.6%、6月-0.4%と最近ではむしろ減少ぎみとなっている。

7月の動きを特殊分類別にみると、耐久消費財は軽四輪車、扇風機、冷蔵庫の著減から-8.5%と目だって減少し、一般資本財もエアコンディショナー、標準変圧器等の減少を中心に-5.5%と大幅な減少を示した。また、非耐久消費財も繊維製品、紙・パルプ、たばこの減少から-0.7%の減少を示し、生産財も鉄鋼一次製品、スフ織物、合繊織物等の増加にもかかわらず、石油・石炭製品、化学製品およびドリル等機械の減少から-0.2%の微減となった。反面、輸送機械は乗用車、トラックを中心に+3.1%とかなりの増加を示し、建設資材も亜鉛鉄板、金網を中心に+1.0%の増加を示した。

以上のような出荷、在庫の動きを映じて、7月の製品在庫率は-1.0%(在庫率指数は104.2)と前月に引き続いて低下し、本年1月以来の低水準となった。特殊分類別にみると、資本財輸送機械、建設資材が上昇したほかはいずれも低下し、とくに一般資本財(-5.9%)および耐久消費財(-14.4%)の低下が目だった。

メーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、5月に+4.6%と大幅に増加したあと、6月(速報)も+1.8%と引き続きかなり増加し、この結果、6月の前四半期末比増加率は+8.5%と3月の同増加率(+4.9%)を大幅に上回った。

6月の動きを財別にみると、素原材料では国産

鉱工業製品在庫の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減率・%)

	41年		42年		42年		
	9月	12月	3月	6月	5月	6月	7月
鉱工業	225.2	221.4	230.7	234.6	236.1	234.6	231.8
指 数							
前期(月)末比	0.4	-1.7	4.2	1.7	0.6	-0.6	-1.2
前年同期比	-1.6	-2.1	0.5	3.8	4.2	3.8	3.8
製品在庫率	115.1	106.0	107.8	105.2	106.8	105.2	104.2
指 数							
投資財	4.3	-1.5	1.8	-3.6	-1.5	-2.2	-1.4
資本財	6.2	-1.0	0.1	-7.5	-2.0	-4.2	-2.5
同(輸送機械を除く)	0.9	3.9	-5.1	-9.8	-1.1	-6.6	-5.5
輸送機械	18.2	-8.2	18.6	-7.2	-5.9	-3.9	3.1
建設資材	1.1	-3.1	5.7	4.1	0.1	1.0	1.0
消費財	-2.2	-1.6	9.7	2.0	1.4	-0.8	-2.3
耐久消費財	-0.4	0.6	16.5	-0.2	1.2	-4.0	-8.5
非耐久消費財	-1.4	-0.3	4.0	3.0	1.5	0.1	-0.7
生産財	-1.3	-2.2	1.2	4.1	0.6	0.5	-0.2

(注) 通産省調べ、42年7月は速報。
前年同期(月)末比は原指数による。

分がパルプ材、鉄くず等を中心に大幅に増加した反面、輸入分は鉄鉱石、原油が前月著増の反動から小幅の増加にとどまったため、+0.9%とやや落ち着いた動きを示したが、月々のフレをならしめてみると、基調としては根強い増勢を続けている(前期末比12月+6.5%、3月+7.7%、6月+8.6%)。他方、製品原材料は製紙・パルプ、染色整理業の織物、化学繊維原料等を中心に+1.9%の増加となった。

原材料消費(季節変動調整済み)は、5月に+0.2%と微増にとどまったあと、6月(速報)は+2.3%とかなりの増加を示した。これには、前月定期修理の関係から大幅な減少を示した石油が、今月はその反動から+11.4%と著増したことがかなり影響しているが、この点を考慮に入れても、原材料消費の基調には鉄鋼(+5.4%)等を中心に引き続き根強いものがうかがわれる。

製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節変動調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	41年			42年		
	12月	3月	6月	4月	5月	6月
在庫指数	135.2	141.8	153.8	144.4	151.1	153.8
前期(月)末比	3.4	4.9	8.5	1.8	4.6	1.8
素原材料	2.6	7.5	11.0	1.5	7.7	1.6
うち輸入分	6.5	7.7	8.6	0.7	6.9	0.9
製品原材料	4.1	2.3	7.2	2.7	2.5	1.9
うち国産分	4.5	2.3	7.3	2.7	2.5	1.9
在庫率指数	66.6	67.0	70.3	67.7	70.7	70.3
素原材料	64.7	67.9	71.8	67.7	73.9	71.8
うち輸入分	65.8	68.0	71.0	67.4	74.2	71.0
製品原材料	71.2	69.9	72.6	71.7	72.7	72.6
うち国産分	71.0	69.7	72.5	71.5	72.6	72.5

(注) 通産省調べ、42年6月は暫定。

以上のような在庫、消費の動きを映じて、6月の原材料在庫率指数(70.3)は前月比-0.6%の低下となった。財別では、とくに輸入素原材料の低下(-4.4%)が目だった。

販売業者在庫(季節変動調整済み)は、3月+2.1%、4月+5.3%と高い伸びを示したあと、5月も+2.2%と前月に比べ増加テンポはいくぶんゆ

るやかになったとはいえ、かなりの伸びを続けた。5月の動きを財別にみると、素原材料では、国産分が石炭等の減少から微減(-0.1%)したにもかかわらず、輸入分が生ゴム、繊維原料等を中心に前月に引き続き著増(+7.7%)したことから+5.2%と大幅に増加した。他方、製品も鋼材(+8.4%)、糸、織物等を中心に+1.6%と増加したが、年初来みられた増勢は多少とも落ち着ききみとなっている。

販売業者在庫の推移

(季節変動調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	41年			42年		
	9月	12月	3月	3月	4月	5月
総合指数	200.4	196.7	213.5	213.5	224.9	229.9
前期(月)末比	1.4	-1.8	8.5	2.1	5.3	2.2
素原材料	6.1	33.1	-7.4	-6.3	2.4	5.2
製品	0.7	-5.5	10.5	2.3	5.6	1.6

(注) 通産省調べ、42年5月は暫定。

(設備投資——増勢持続)

設備投資の先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)の動きをみると、6月に+21.8%と急増したあと7月は-9.9%と減少した。しかし、これには前月著増をみた電力向けの反動減が大きく響いており、海運、電力を除いた民需では+6.4%と根強い増勢を示している。

7月の動きを業種別にみると、製造業は鉄鋼、窯業、化学が減少した反面、自動車、紙・パルプ、石油精製が著増したことから+15.9%と大幅増加を示した。一方非製造業(海運を除く)は、上記電力の著減を主因に-36.2%と大幅な減少を示した。

なお、最近の機械受注残高の増加傾向から、月間販売額の漸増にもかかわらず、受注残高手持月数は年初の8.7か月分から6月には9.6か月分へと増加している。

また、同じく先行指標である建設工事受注(民間産業、季節変動調整済み)の動きをみると、6月に製造業を中心に+14.0%と大幅に増加したあ

と、7月(速報)も+11.5%と引き続き大幅増加となった。最近の動きを3ヵ月移動平均によってならしてみても、4月+3.1%、5月+5.2%、6月+3.3%とかなりの増加基調を継続している。なお、官公庁向け受注も6月+6.6%、7月+9.8%とこのところしだいに遅れを取りもどす動きを示している。

需要先別機械受注の推移

(季節変動調整済み、月平均、単位・億円)

	41年	42年		42年		
	10~12月	1~3月	4~6月	5月	6月	7月
民 需	990 (17.5)	1,179 (19.1)	1,340 (13.6)	1,247 (- 7.6)	1,422 (14.0)	1,415 (- 0.5)
同(除海運)	890 (22.3)	1,060 (19.1)	1,300 (22.6)	1,160 (-12.6)	1,413 (21.8)	1,273 (- 9.9)
製 造 業	527 (47.6)	631 (19.7)	787 (24.8)	794 (- 7.7)	708 (-10.8)	820 (15.9)
非製造業	459 (- 5.4)	536 (16.7)	566 (5.7)	458 (-15.7)	697 (52.3)	597 (-14.4)
同(除海運)	362 (- 2.6)	421 (16.4)	520 (23.5)	387 (-19.8)	690 (78.2)	440 (-36.2)

(注) 経済企画庁調べ、カッコ内は前期(月)比増減率(%)。

◇商品市況は鉄鋼の軟化目だつても、その他の商品は総じて底堅い動き

7月から8月前半にかけての商品市況をみると鉄鋼は7月中旬を境に再び反落商状を呈し、その後もほぼ全品種にわたって軟化を続けた。しかし繊維では、生糸が上伸、綿糸、スフ糸、そ毛糸もそろって高値圏内のもみ合い状態のままで推移し、また、その他の商品でも、非鉄(銅、鉛)、石油、セメント、木材、紙、砂糖等底堅い動きを示すものがかなり目だった。

このように、最近の商品市況の足どりをみると、鉄鋼が軟化の度合いをやや強めつつあるほかは総じて強含みないし強保合い状態を続けている。その背景には、もとより海外相場の上昇(銅)、スエズ運河閉鎖によるフレート高(石油)、人手不足による供給面の制約(綿糸、スフ糸、織物)、自主生産調整の動き(砂糖)などそれぞれ特殊な事情が少なからず響いているとみられるが、一般に国内需

要が根強いテンポで拡大を続け、これが需給地合いそのものを底堅いものにしてきている点もいぬめない。もっとも、このような実需の堅調にもかかわらず、鉄鋼はほとんど全品目にわたって下押し商状を続け、他商品の動きをよそにこのところ落勢が目だっている。これは夏期休暇による需要業界の手当一服など一時的な事情による面があるにしても、たとえば薄中板などにみられるように、生産の増加テンポがここ数ヵ月かなり目だっており、これに伴って供給面の圧力が強まったことも大きな背景となっている。

次に、商品別の動きをやや詳しくみると、まず鉄鋼では7月中旬以降鋼板類、条鋼類ともに再び下げ歩調に転じ、とくに薄中板は8月央には39~40年不況期の最安値を下回る水準にまで落ち込むに至った。このような鋼材市況軟化の背景は、民間需要は根強い増加基調をたどっているものの、夏休みの関係から自動車、電機、建設関係からの需要が多少伸び悩みを示し、また官公需や輸出も依然盛り上がり欠けること、薄板を中心とするホットコイル関連製品については、このところ増産テンポがかなり急であり、メーカー、流通段階の在庫圧力が漸次強まっていることなどの諸事情が重なって、需給地合いが引きゆるみをみせてきているうえ、先行きの景気動向に対する金融財政当局の警戒的な発言が相次ぎ、これが市場人気の後退を拍車した点も見のがせない。一方、繊維は品目によりやや区々な動きとなったが、総じてみると高値圏内でもみ合いを続けたものが多い。すなわち、綿糸は7月中機屋筋の手当一服などから一時小幅軟化を示したものの、生産が引き続き伸び悩み、在庫が低めの水準にあることから再び小もどすなど、多少の高下を繰り返しつつ底堅い動きを続けており、スフ糸、そ毛糸も高値圏内でもみ合い状態を続けた。この間、生糸は、需要期入りに伴う機屋筋の手当活発化等により高値を更新し、また織物類も総体として強含みに推移した。非鉄では、銅が米国の産銅スト長期化に伴う海外相場の上昇や国内需給の引き締まり傾向を

映じて大勢堅調に推移したほか、鉛もバッテリー向け需要の堅調にささえられて強含みを続けたが、亜鉛は、需給の均衡化傾向にもかかわらず、メーカー筋の売込み競争や海外相場の軟化が響いて保合い圏内の小浮動にとどまった。

次に石油では、スエズ運河の閉鎖に伴うタンカーレートの急騰から、メーカー筋では値上げの方針を打ち出し、また需要家側でも大手薪炭業者などが先行きの品不足を予想して買い進む動きを示したため、灯油、軽油、重油ともに上伸歩調をたどった。また、セメントは、盆休みによる人手不足などから建設工事がいくぶん停滞ぎみとなっているものの、官公需が一部でやや増加しつつある事情をながめ、メーカー筋の売り腰もしだいに強まってきたため市況は強保合いに推移した。木材では品不足の目だつ桧材が7月に上伸したのに続き、更月後は主として内地材を中心に需要期接近に伴う仲買い筋の手当買いがみられ、総じて強含みとなった。他方、化学は、基礎薬品類ではカーバ

イド、かせいソーダ等が値上がり傾向を続けたほか、塩素、塩酸、硫酸等軟化の度合いが薄れつつあるものも少なくないが、合成樹脂は相変わらず軟化基調を改めていない。紙では、洋紙が不需要期入りにもかかわらず、出版業界からの根強い需要にささえられて小じつかりに推移したほか、板紙も段ボール原紙や白板紙ではようやく底値感が台頭するなど、総じて強含みとなった。砂糖は、メーカー間の自主生産調整の動きが漸次具体化の方向をたどりつつあることを好感してじり高商状を示したが、更月後はもみ合い場面を呈している。
(卸売物価——じり高傾向)

7月の卸売物価は、前月比+0.2%と6月(+0.2%)に引き続き小幅ながら上昇した。7月の上昇は、非鉄(銅)、化学(化学肥料)等の下落にもかかわらず、木材・同製品(原木、角割材)、繊維(生糸、スフ糸、絹織物)、食料(牛豚肉)が上昇したほか、石油・石炭・同製品(重油、原料用炭)が、スエズ閉鎖によるフレート高から反騰し、さらに

卸売物価指数の推移

(単位・%)

	ウエイト	下降期 (ピーク 38/11) →40/7	上昇期 (ボトム 40/7) →42/7	最近の推移							
				42年			42年7月			42年8月	
				5月	6月	7月	上旬	中旬	下旬	上旬	
総平均	100.0	- 0.7	+ 6.7	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.1	保合	+ 0.3	+ 0.1	
食料品	16.4	- 0.4	+ 5.4	- 0.1	- 0.2	+ 0.3	+ 0.3	- 0.1	+ 0.3	+ 0.2	
繊維品	12.9	- 8.0	+ 14.1	+ 1.7	+ 0.9	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.5	- 0.2	+ 0.3	
鉄鋼	10.2	- 3.4	+ 6.1	- 1.1	+ 0.1	+ 0.3	+ 0.2	- 0.1	- 0.3	- 0.3	
非鉄金属	4.5	+ 18.4	+ 8.8	- 2.2	+ 1.1	- 0.8	- 0.4	+ 0.6	+ 0.2	+ 0.4	
金属製品	3.5	+ 4.1	+ 6.6	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.5	+ 0.5	保合	- 0.1	保合	
機械器具	20.2	- 0.6	+ 1.2	+ 0.1	- 0.1	+ 0.1	保合	保合	保合	保合	
石油・石炭	5.2	+ 1.0	- 3.0	- 0.3	- 0.6	+ 0.3	+ 0.3	保合	保合	+ 0.7	
木材・同製品	6.1	- 2.7	+ 27.8	+ 0.1	+ 0.3	+ 0.8	- 0.3	+ 0.1	+ 2.0	+ 0.5	
窯業製品	3.0	- 0.8	+ 6.3	+ 0.3	保合	保合	保合	保合	保合	+ 0.3	
化学品	7.4	+ 1.9	- 3.1	保合	保合	- 0.2	- 0.5	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	
紙・パルプ	3.3	- 0.3	+ 4.5	+ 0.6	+ 0.1	- 0.1	保合	保合	- 0.2	- 0.1	
雑品目	7.5	+ 1.1	+ 6.2	+ 0.2	+ 0.4	保合	保合	- 0.1	- 0.1	- 0.3	
工業製品	79.5	- 1.4	+ 5.2	保合	+ 0.2	+ 0.1	保合	+ 0.1	保合	+ 0.2	
非工業製品	20.5	+ 1.5	+ 12.2	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.6	+ 0.2	保合	+ 0.6	+ 0.1	
非鉄・食料を除く 総平均	79.1	- 1.8	+ 6.9	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.2	保合	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.1	

(注) 本行調べ、35年基準指数による。

鉄鋼も7月上旬における条鋼類を中心とした急テンポ上伸が響いて、月中では若干の上昇(+0.3%)となったことなどによるものである。なお非鉄、食料を除く総平均でみても、5月+0.2%、6月+0.3%のあと7月も+0.2%とこのところじり高傾向が続いている。8月にはいつてからの動きをみても、上旬は鉄鋼の続落にもかかわらず、木材・同製品(角割材、板材、合板)、食料(牛豚肉)、非鉄(銅合金、銅くず)、石油・石炭・同製品(原油、揮発油、重油)の続伸と繊維(綿糸、スフ糸、生糸)の反発などから前旬比+0.1%と続騰した。

(消費者物価——大勢落着きの中にもこのところやや上昇きみ)

7月の消費者物価(東京)は、5月-1.2%、6月-0.5%と軟化したあと、前月比-0.1%と小幅ながら引き続き低下した。これは、野菜、くだものな

どの生鮮食品が豊作による入荷好調を映じて引き続きかなりの低下を示したほか、被服費(夏物衣料品)、光熱費(灯油)、住居費(家庭電機)等も下落したことによる。もっとも8月は野菜、くだもの、肉類等食料品の値上がり響いて前月比+0.7%と5ヵ月ぶりに上昇し、季節商品を除いた総平均でみても、7月は前月比+0.1%と5、6月並みの微騰を示したあと、8月は+0.3%といくぶん上昇きみとなっている。この間、7月の本行小売物価は、野菜の下落にもかかわらず、その他の食料品、建材、雑品目(切花)の上昇が響いて前月比+0.3%の反騰を示した。なお、全国消費者物価の動きをみると、6月は住居費、被服費、雑費が若干の上昇を示したものの、食料品(野菜、乳卵)がかなり下落し、また光熱費も不要期入りに伴う灯油の軟化などを映じて微落したため、前月比-0.6%と続落した。7月は野菜、くだもの値下がりから前月比-0.1%と低下したものの、低下幅は5、6月ころに比べると目だって縮小している。

(輸出入物価——輸出物価は続騰、輸入物価は反落)

7月の本行輸出物価は、木材・同製品(合板)、化学(ビタミン剤、ポリエチレン)が下落したものの、食料品(冷凍まぐろ)、金属(洋食器)、窯業製品(ディナーセット)が上昇したことから前月比+0.2%と続騰。一方、輸入物価はスエズ運河閉鎖に伴うフレート高の影響で石油・石炭(重油、原料炭)、金属(くず鉄)の上昇が目だったものの、食料品(粗糖)がかなり下落したほか、繊維品、木材・同製品、雑品目(皮、ゴム)等軟化を示す商品が多かったため、総平均では-0.3%と低下した。この結果、交易条件指数は+0.5%と引き続きかなり好転した。

◇総合収支の逆調続く

7月の国際収支は、貿易収支が季節的事情に加え、輸入が前2ヵ月著伸のあと、やや増勢一服きみとなったことから、前月に比べ黒字幅をかなり拡大したが、反面、貿易外収支、長期資本収支が引き続き大幅な逆調を続け、また、このところ多額の流入を続けてきた短期資本も、7月は流出超

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位:%)

	ウエイ ト	前年度比 上昇率		最近の推移			前 年 同 月 比	
		40年度 平均	41年度 平均	42年				
				5月	6月	7月		
消 費 者 物 価 (東 京)	総 合 (季節商品 を除く)	100.0	+6.8	+4.7	-1.2	-0.5	-0.1	+1.7
		91.4	+6.2	+4.9	+0.1	+0.1	+0.1	+2.2
	食 料	40.9	+8.1	+3.0	-3.2	-1.6	+0.5	+0.9
	住 居	10.7	+4.4	+5.7	+0.3	+0.2	-0.1	+4.2
	光 熱	4.5	+0.4	0.0	保合	-0.1	-0.2	-0.9
	被 服 雑 費	13.0	+3.8	+3.6	+0.3	保合	-1.7	+1.5
	31.0	+7.5	+7.9	+0.3	+0.3	+0.1	+2.5	
物 価 (全 国)	総 合 (季節商品 を除く)	100.0	+6.4	+4.7	-0.6	-0.6	-0.1	+2.4
		91.4	+6.1	+4.7	+0.4	+0.1	+0.1	+2.5
小 売 物 価 (東 京)	総 合 (季節商品 を除く)	100.0	+7.4	+4.6	-0.8	-0.5	保合	+2.3
		91.3	+7.0	+4.6	+0.2	+0.3	+0.1	+2.5
輸 入 物 価 (契 約 ベ ー ス)	輸 出		-0.7	+1.4	+0.3	+0.4	+0.2	+1.6
	輸 入		-1.0	+0.7	+0.2	+0.2	-0.3	-2.7
	交易条件		+0.3	+0.6	+0.1	+0.2	+0.5	+4.4

(注) 消費者物価(40年基準)は総理府調べ、小売物価(40年基準)、輸出入物価(35~37年基準)は本行調べ。

となったため、結局総合では64百万ドルの赤字とほぼ4～6月並みの逆調を持続した。

貿易収支では、輸出が依然不振を続けている反面、輸入がいくぶん落ち着きぎみに推移したため、季節調整後の貿易収支じりの黒字幅は、前月比わずかに拡大したが、その水準はなお4～6月平均を相当下回っている(7月、黒字76百万ドル、4～6月平均100百万ドル)。貿易外収支は輸入規模がここ数ヵ月に比べいくぶん縮減したこともあり、赤字幅がやや縮小したが、水準はなお相当の高さにある。

長期資本収支は、延払信用供与の増加を主因に77百万ドルの流出超となったが、短期資本収支は、輸入がいくぶん落ち着きぎみとなり、BCユーザンスの利用がさほどふえなかったことが響いて、年初来の流入超傾向とは一転して9百万ドルの流出超となった(4～6月平均63百万ドルの流入超)。

金融勘定では、為替銀行が先行きをおもんばかっていくぶん外銀借入れを手控える態度を示したものの、海外短資が流入を続けたため、為替銀行の短期資産負債バランスは悪化を続けたが、外貨

準備も前月に引き続きかなりの減少(38百万ドル)となった。

7月の輸出は、前年同月比+3%と伸び率はさらに鈍化(4～6月平均+8%)、季節調整後も前月比-3%の減少となった。これは、米国向けが依然不ざえ傾向を改めていないうえ、東南アジア向けも香港の政情不安や、南ベトナムの輸入関税引上げなどが響いてかなり伸び悩んだためである。通関統計で品目別の動きをみると、機械類はまずまずながら、鉄鋼が引き続き同月をかなり下回っているほか、繊維品の不振が目だっている。

先行指標をみると、7月は、輸出信用状が前年同月比+3%と相変わらず一進一退の低迷基調にあるほか、輸出認証も前年同月比+1%と一段と伸び悩んでいる。輸出信用状の内訳をみると、米国向けは鉄鋼を中心によく最悪期を脱しつつあるやうかがわれる(6、7月とも前年比1割増)が、反面、アジア向けは上述のような事情から前年同月を下回り、不振の様相を呈している。

こうした動きから当面なお輸出の伸び悩み傾向が続くものとみられる。

7月の輸入は、前年同月比+20%と、前2ヵ月の伸び(5月+27%、6月+30%)に比べれば増勢がいくぶん鈍化し、季節調整後の前月比でも久方ぶりに減少(-4%)した。もっとも、3ヵ月移動

国際収支

(単位・百万ドル)

	41年			42年			前年 同月
	10～ 12月	1～ 3月	4～ 6月	5月	6月	7月	
経常収支	166△	58△	55△	128△	43	66	193
貿易収支	255	51	59	17	77	170	263
輸出	921	742	832	808	845	881	855
輸入	666	691	773	825	768	711	592
貿易外収支	△73	△88	△98	△100	△97	△89	△62
移転収支	△15	△21	△16	△11	△23	△15	△8
長期資本収支	△102	△61	△64	△47	△72	△77	△57
短期資本収支(注1)	△17	△44	△63	△60	△81	△9	△13
誤差脱漏	△30	△20	△13	△42	△17	△44	△31
総合収支	17△	95△	69△	73△	51△	64△	92
金融勘定(注2)	17△	95△	69△	73△	51△	64△	92
外貨準備増減	10	1△	1	18	36△	38△	50
その他	7△	96△	68△	91△	15△	26	142

(注1) 金融勘定に属するものを除く。

(注2) 金融勘定の△印は純資産の減少。

各期月平均。

輸出入指標の推移

(季節調整済み、単位・百万ドル)

	国際収支			通関		信用状			輸出 認証	輸入 承認
	輸出	輸入	貿易 じり	輸出	輸入	輸出	輸入	差		
41年										
7～9月	808	632	176	817	810	669	355	314	841	776
10～12月	851	673	178	868	864	679	381	298	885	817
42年										
1～3月	829	685	144	848	908	675	394	281	905	866
4～6月	840	740	100	856	944	675	377	298	874	952
42年										
3月	814	699	115	828	919	683	404	279	896	896
4月	854	705	149	865	908	665	372	293	867	821
5月	822	742	80	842	955	655	387	268	879	905
6月	843	774	69	861	969	703	373	330	877	1,130
7月	822	746	76	840	940	672	368	304	870	948

(注) 季節調整はセンサス局法による。各期月平均。

平均(季節調整後)でならしてみると、前月比で4月+4%、5月+4%、6月+2%と依然増加基調を示している。通関統計によって品目別の動きをみると、繊維原料(羊毛)や食料品(小麦、とうもろこし)等はこのところ前年同月を下回っているが、他方、くず鉄、銑鉄、鉄鉱石等は依然高い伸びを持続し、金属加工機械の輸入もこのところやや目だちは始めている。

7月の輸入承認は、前年同月比+27%と高水準

輸出信用状の内訳

(単位・百万ドル)

	41年			42年		
	10~12月	1~3月	4~6月	5月	6月	7月
合計	664 (+10)	664 (+5)	689 (+3)	716 (+4)	706 (+5)	693 (+3)
食料品	30 (+18)	26 (-10)	25 (-1)	24 (-4)	26 (-4)	27 (+4)
水産品	21 (+19)	18 (-12)	16 (-1)	15 (-12)	18 (+18)	22 (+31)
繊維製品	128 (+6)	117 (+4)	112 (-4)	122 (+2)	113 (-6)	116 (-8)
綿製品	25 (-4)	21 (-20)	19 (-24)	22 (-11)	18 (-30)	17 (-38)
化学製品	48 (+15)	50 (+1)	58 (+14)	62 (+21)	57 (+15)	46 (-6)
肥料	9 (-13)	12 (-26)	17 (+5)	19 (+8)	19 (+4)	9 (-34)
金属製品	134 (+2)	141 (-2)	143 (-1)	142 (-8)	152 (+7)	150 (+1)
鉄鋼	125 (+8)	129 (-2)	132 (-1)	129 (-10)	141 (+7)	138 (+2)
機械	188 (+16)	195 (+15)	203 (+9)	214 (+14)	204 (+10)	212 (+18)
船舶	6 (-16)	9 (-6)	6 (-31)	8 (+67)	7 (-51)	7 (-5)
自動車	43 (+4)	51 (+17)	51 (+12)	53 (+5)	47 (+38)	42 (+19)
その他	137 (+9)	135 (+3)	148 (+2)	153 (+1)	152 (+6)	142 (+1)
米 国	262 (+12)	263 (+1)	282 (+2)	288 (-0)	293 (+10)	297 (+10)
ア ジ ア	196 (+10)	196 (+15)	196 (+8)	197 (+1)	200 (+14)	193 (-4)
欧 州	67 (-3)	75 (-8)	72 (-2)	73 (+3)	74 (-3)	67 (-3)
その他	139 (+10)	130 (+6)	139 (+2)	158 (+16)	139 (-9)	136 (+4)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

を持続している。品目別にみると、繊維原料は落ち着いているが、その他は、金属原料、木材、機械等を中心に根強い増勢を示している。この間におけるメーカーの輸入素原材料在庫率の動き(季節調整後)をみると、4月67.4、5月74.2、6月71.0と5、6月の水準は4月に比べかなり上昇しており、これが7月の輸入をある程度落ち着かせた一因ともみられるが、原綿、原毛、石油等一部の品目を除いては、在庫率の絶対水準はそれほど高まっているわけでない。したがって当面、在庫面から原燃料輸入が目だって減少する可能性はまずないものとみられる。

輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	41年			42年		
	10~12月	1~3月	4~6月	5月	6月	7月
食料品	147 (+10)	148 (+15)	154 (+7)	165 (+13)	144 (+6)	131 (+17)
原燃料	476 (+25)	473 (+18)	481 (+20)	500 (+23)	494 (+23)	488 (+16)
羊毛	34 (-8)	32 (-7)	30 (-15)	33 (-18)	29 (-17)	27 (-21)
綿花	30 (+1)	44 (+14)	31 (+18)	35 (+31)	30 (+49)	27 (-15)
鉄鉱石	43 (+48)	45 (+25)	47 (+29)	51 (+41)	44 (+8)	47 (+31)
鉄鋼	23 (+212)	26 (+236)	33 (+220)	26 (+100)	46 (+318)	31 (+154)
くず	24 (+53)	22 (+38)	21 (+13)	20 (-4)	22 (+9)	25 (+17)
非鉄金属	24 (+53)	22 (+38)	21 (+13)	20 (-4)	22 (+9)	25 (+17)
木材	61 (+44)	58 (+31)	72 (+38)	81 (+57)	73 (+39)	73 (+38)
石炭	23 (+37)	26 (+35)	27 (+50)	29 (+61)	28 (+45)	26 (+8)
石油	103 (+14)	109 (+10)	102 (+23)	109 (+35)	98 (+25)	104 (+19)
化学製品	49 (+21)	50 (+25)	53 (+27)	53 (+32)	53 (+23)	55 (+29)
機械	71 (+37)	68 (+49)	155 (+171)	77 (+23)	298 (+341)	81 (+34)
鉄鋼	26 (+235)	31 (+22)	32 (+222)	31 (+230)	30 (+218)	41 (+198)
その他	74 (+59)	81 (+62)	94 (+45)	92 (+51)	91 (+38)	106 (+68)
合計	842 (+27)	851 (+26)	969 (+35)	918 (+27)	1,110 (+53)	901 (+27)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。